

第53号

平成29年
5月1日

題字
植木 満
初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会

〔茨城県立土浦一高〕
進修同窓会東京支部

発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階
宮崎法律事務所 気付 東進会事務局
TEL (FAX) 03-5421-5321
E-mail : toshinkaisecretary@gmail.com



提供 青木 功 (フォトグラファー 昭和50年卒)

■ 「まさかの坂がありました その2」

～関東東北豪雨のその後～

鶴見 美智子 (昭和50年卒)

■ 第7回アカンサスクラブ講演録

「アーバンデザインとアーバンマネジメント」

後藤 良子 (平成9年卒)

■ 第8回アカンサスクラブ講演録

「真にブランドを創造するもの」

森 泰規 (平成8年卒)

■ リレー放談

「大相撲から寺社仏閣巡りまで」

緒方 浩一 (平成7年卒)

■ 平成28年度大学合格者

進修同窓会だより

東進会会長 飯塚 哲哉(昭和41年卒)

■ 平成29年度 総会・懇親会ご案内

『まさかの坂』がありました その2
 ～関東東北豪雨その後～

鶴見美智子(昭和50年卒)

日本列島はつくづく災害列島だと思いません。昨年5月発行の『東進』に掲載していただいた関東東北豪雨の記事の後、熊本や鳥取で大きな地震が立て続けに日本を襲いました。

TVに映し出された壊れた家屋や悲しみに暮れた人々の表情、それらを見ると、同じ自然災害を体験した者として心底「頑張った！」という言葉しか出てきませんでした。

現在の常総市の現状を見ると、決壊した鬼怒川の上三坂地区の補修工事事は終わり、新八間堀川の工事終了も間近のようです。2月には圏央道の常総インターが開通して、一見いつもの生活が戻ってきたように見えます。



しかし、右の写真で分かるように水没のひどかった我が地区では更地が目立ちます。1階の天井近くまで水が来てしまったため、長年住み慣

れた家を壊して他の市町村に移り住むという事は、家族全員にとって苦渋の決断だったことでしょう。

また、私の近所に住んでいる、特に高齢の方が相次いで他界されていることも、心が痛むことの一つです。水害の時には、まだお元気で地域の中心になって活動されていました。元の生活に戻そうと必死になっていたらしい気持ちを思うと、残念でたまりません。

しかし、近所同士の連帯感はより強くなってきたように思います。毎日の挨拶はもちろん、出会えばお互いの様々な事などに話がはずみます。これは日本全国各地でもある事なのでしょうが、水害で苦労を共にした同士の連帯感が根底にあるような気がしています。

また、水害からの復興のために市内はもちろん、県内外からたくさんの方々の協力を得ることができ、私達はその中で、様々なことを学ばせてもらう機会を得ています。ここでは、それらの一部を紹介させていただきます。

災害への意識を学ぶ

最近のTVで特に印象的だったのは、東北地方のある町に残されている石碑に関係した番組でした。それには、

高き住居は見孫に和楽

という文章が刻まれています。意味は、(津波に備えて)子孫のために家は高台に作ったほうが良い、というもの。昔の人はこのような教訓を子々孫々に伝えようとしていたのだとした。では我が常総市はというと・・・ありました。



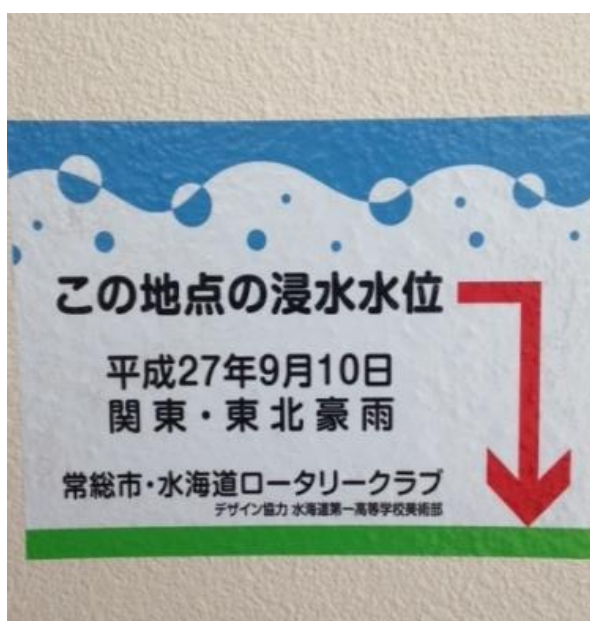
我が家から歩いて三分、鬼怒川からも近い御城公園の隅に『大洪水水位記録碑』が建っていました。碑の脇には、昭和13年と16年に洪水が起きた事実と水位の高さも書いてあります。しかし、私がこの碑の存在に気付いたのはたった一年前。今回の水害の後でした。それまでは、資源ごみを出す場所の近くにある何かの石碑？くらいにしか意識していなかったのです。何という事でしょう！

以前、和歌山県にある『稲むらの火の館』を訪れたことがあります。これは、ご存知の話だと思いますが、地元の商人、濱口梧陵が、津波が来ることを人々に知らせるために、自分の田の稲むらに火をつけて人々を高台に避難できるようにさせたとい

う逸話から作られた展示館です。また、神戸には、阪神淡路大震災の被害状況を保存した『震災メモリアルパーク』があると聞きます。

いつかは来るかもしれない自然災害ですが、毎日の忙しさに私たちはそれを忘れがちです。そうならないためにも、街の中に災害を記録した記念館や、意識される何かが必要だと思えます。

その解決策の一つとして、常総市で最近見られるのは、生涯学習センターや市役所など主要な建物に貼られた水位ステッカーです。



今は限られた場所だけですが、電柱や目立つ建物などにも貼っていけば、日常的に今回の水害の記憶にたどり着くことができるでしょう。

しかし、忘れてはいけないのは、これらステッカーの示している水位は、あくまでも平成27年での数字。時と場合によって変わるものであることも覚えておきたいものです。

第7回アカンサスクラブ講演録

(平成28年9月21日)

アーバンデザインと

アーバンマネジメント

後藤良子(平成9年卒)

私は大学で建築デザイン、大学院でアーバンデザインを学んだあと、建築・都市計画を専門とするコンサルタンツ会社に勤めていました。幅広いプロジェクトに関与し、経験を積み重ねる一方で、まちづくりの計画を策定して、報告書としてクライアントに納めるだけではなく、責任をもってそれを実現するところまで担いたいという思いが強くなり、



2011年にURBANWORKSという会社を立ち上げました。

現在は、まちづくりのビジョン・構想づくり、構想に基づく戦略立案、空間のランドデザイン、建築デザイン・コードの策定、都市空間の基本計画・設計などを行う「アーバンデザイン」事業と、構想実現のための戦略的な企画推進・関係者調整、構想に基づくまちづくり関連組織の運営・経営、ベンチャー共創事業・新規事業支援などを行う「アーバンマネジメント」事業を行っています。

前職時代を含め、私がこれまで経験してきたプロジェクトの中から、以下に三つをご紹介します。

一つ目は、2006年から5年ほど携わった、東京都・目黒区の自由が丘サンセットエリアのまちづくりです。住民・地権者の皆さんと一緒にまちづくりとは何なのかという勉強から始め、どのような街を目指したいのかという将来像のイメージを構築しました。

そして、将来像実現の計画を立て、それを実現するための実現手法を定め、実際に実行していきました。街づくりに対する地元の思いがまだまだとまっぴらない頃には、意識醸成の意味も兼ねて、小学生のまちづくりの提案を建築や都市計画を学ぶ大学生が具体化する街づくりコンペなども実施しました。

その後、地域の共通の思いとして街のランドビジョンを策定し、今

ある街の価値をしつかり残しながら、さらに街の魅力を増していくために、法的なルールとなる街並み誘導型地区計画や街づくり協定を策定しました。これにより、エリアの特徴である路面店の並ぶ通りを散策する楽しさを残しながら、地権者から見ると不動産価値の維持・向上を実現するという仕組みが実現できました。

また、街全体の魅力を継承していくため、古くなっていった石畳の路面を、心地よい雰囲気は残しながらも、歩きやすく散策を長時間楽しめるようなものにするためのペーブルメントのデザイン、設計・施工監理も行いました。これらの施策の総合的な効果で、同エリアは以前にも増して魅力的な界隈に生まれ変わり、毎日賑わいを見せています。

二つ目は、2005年から現在に至るまで十数年にわたり携わっている、つくばエキस्प्रेस・柏の葉キャンパスのまちづくりです。柏の葉キャンパスには、公・民・学がひとつのオープンなプラットフォームで一緒にまちづくりを進める場として、UDCK(柏の葉アーバンデザインセンター)という施設を駅前につけていますが、その構想・立ち上げに関わりました。

柏の葉キャンパスではこのUDCKを拠点に、「柏の葉キャンパスタウン構想」とよばれる、行政だけに頼らない公・民・学共通のランドビジョンを策定して現在でもその構想



のもとでまちづくりを推進することで、各組織の人事異動などにも影響されない、継続的で一体感のあるまちづくりが実現しています。

その後、内閣府の主導による「環境未来都市」や「地域活性化総合特区」の提案書の取りまとめも担当し、どちらも2011年に正式な指定を受けることができました。

三つ目は、柏の葉キャンパスのまちづくりの中で、「新産業創造」のコンテンツとして深化していったプロジェクトで、つくばエキस्प्रेस沿線の技術シーズをビジネスとして社会普及させる目的の、ベンチャー企業支援組織「TXアントレプレナーパートナーズ(TEP)」の設立運営です。

TEPは、個人投資家であるエンジェルのほか、士業などの専門家、地域行政や大学・研究機関、ベンチャーキャピタル、オープンイノベーションを推進する大手企業などをひとつのプラットフォームに集めて、日本の技術力を生かしたベンチャー

企業の成長をスムーズに支えるエコシステムを構築しており、日本でも極めて稀な例として、注目を集めています。

現在、私は日本橋にflat5というオフィス・活動拠点を設立し、都内のデザイナー等と地方都市の地域産業や技術を繋ぎ、新しい価値を生み出して国内外へ発信していくことで地域の経済的活性化を図るプロジェクトに取り組んでいます。

また、柏の葉のUDCKから始まった全国15拠点のアーバンデザインセンター(UDC)を統括し、新たなUDCの設立や、各UDC間のノウハウや人材の共有を行うUDCイニシアチブの立ち上げ・運営に参画し、公・民・学連携のアーバンデザイン・プラットフォームを広く普及させていく活動をしています。

縦割り型の組織運営や既存の仕組みへの過剰な執着など、まちづくりの現場には、良い街を作っていくという目的とは別次元の課題が多数存在しています。

しかし、各関係者が「良い街を作りたい」という思いを共有できれば、少しずつイノベーションを起こして目標を実現していく方法は必ずあります。今後もその現場に立ち続け、魅力的な街を少しでも多く支援していきたいと思います。

第8回アカンサスクラブ講演録

(平成28年12月21日)

真にブランドを創造するもの

〜理念と継承

「二人の川村先生」

森 泰規(平成8年卒)

(12月の講演に加筆したものである)

私は広告会社で、ブランドを中核とした事業課題解決に向けて顧客に奉職している。その経験に即して憂慮するのは、存在意義を理念化して説明できない事業は、成功をのぞめないということである。しかしほとんどの場合「何を売る」「どう売る」というような、手法や技術に終始する。本当の意味で事業が成功し、継続するためには、個々の商品やサービスはもちろんのこと、「その企業が存在しなければならぬ理由」を持つ必要がある。

よい例がEMIだ。ビートルズ他のレコード収入で巨万の富を得た同社は、世界初のCTスキヤナーの実用化に成功し、それは間違いなく医学と人類の歴史を変えた。開発者はノーベル賞も受賞した。しかし、数年で撤退を余儀なくされる。

人類の歴史を変えるような画期的発明を得ても、理念なくして事業は立たない。

これは人生事業として個人の生き方に置き換えてもあてはまる。しか

し、こういう話をすると、「稲盛和夫さんは理念だけの人ではなかった」というご指摘を必ず頂く。その通りだけれど、数々の精緻な経営戦略を形にした成功者でありながら「それでも理念が大事」といえるところが稲盛氏の凄さだ。結局、そこが違うだ。

講演を終えた年末に、シリコン・バレーの経営者談話が日本経済新聞に掲載された。いわく日本のベンチャー企業は「クールではない」そうである。マネタイズばかりを考えて、社会における存在意義を考えないまま起業しているものが多いと。

「ああ、まただ」と思った。私たちが内包していながら無自覚であった本当の強さを、彼らは巧く評価し、私たち以上に取り込んで成長している。特にこの例は心学(石田梅岩)の思想を、プロテストアンティズムの倫理と資本主義の精神と対置させて研究し、逆に日本へ紹介したのが、北米におけるマックス・ウェーバーの継承者ロバート・ベラーであったことにも通じ、苦い余韻を残した。

###

一方でブランドの教科書を開けば必ず登場するヴァージングループの創業者ブランドソンは、自伝著書において「どこの企業の経営理念も社名を置き換えても成り立つようなものばかりでいらだつ」と書いている。

この人の直感的な発言は爽快だ。まさしく、多くの企業の経営理念なるものは、日本でもブランドソンが指摘しているようなことになっている。彼の手がけた事業の二つ目は、大學生向けの電話相談センターであった。困っている人たちの役に立ちたい、いまだ提供されていないサービスを斬新な手法で提供したい、という理念がそこにはある。そして、一つひとつ彼のやった事業会社を見ていくと、同じ理念がやはり強く出てくる。

言葉となった理念もあってよい。その理念の体現者たる人が強く心に残るのもよい。―― 事業を行ううえで、存在意義のようなものを失わなければ。

そうと確信する原点の一つは土浦一高にある。私は、川村先生がジーニアス英語辞典を手渡しておっしゃった日のことを今でも覚えている：「君たちに日常会話の英語など教えるつもりはない。やがて世界の線で競い合うための教養として、教えるのだ」と。この発見こそは、その後の私の探求における理念であり、また土浦一高での経験における本質的価値にほかならない。

これはさまざまなことに通じる本質である。たとえば作曲家のコードイは言った「楽器は道具に過ぎない、歌わなければ」と。それが何のため

のものか、目的と理由が明らかなき、まったく別の意味を持つて姿を現すものとなる。ソニーの小林茂氏は「人の心に旗を立てる」とたとえた。

#

ここで少し事実関係を整理しておくと、土浦一高の英語科には二人の川村先生がおられる。私が指導を受けたのは川村和夫先生であり、もうひとつ上の世代に川村安宏先生。しかし二人の川村先生は、いずれも同じ指導をしていたことが、先輩方の証言により分かった。そこで暮れに和夫先生のご自宅を訪れ、20年ぶりにお会いした。実はその逸話は覚えていないということだったが、わずかの間をおいて「あるとすれば、安宏先生の影響だな」と。

その指導を受けた生徒はもとより、二人の川村先生の間にも時間的・空間的な隔絶がある。しかしその隔絶を乗り越えて、学ぶことの意義、理念は継承されていた。こうしたものをこそ、本質的価値と呼ぶべきであり、少なくとも私は単なる偶然とは信じない。

一方の川村安宏先生。書簡により経緯を説明したところ3日ほどで返信。原稿用紙4枚にわたって、震える字による事実確認が綴られていた。私信のため内容は公開しないが、締めくくりには「今夜はもう寝ます」

とあった。

—— 今夜は。

まだ物語は続いているのだ、たぶんかつてと同じままで。私だつてそうだ。「ジーニアス」はまだ持っている。

#

現在、旧校舎の建て替えに向けた資金獲得活動が進んでいると聞くが、あくまで建物としてみるのならば、それは外形にすぎない。篤志家が資金提供に応じるとするならば、学びがもたらした本質的価値と結びつけてのこと——。それは生徒一人ひとりに応じて違つてもよい。英語の川村先生が「二人の川村先生」であったように、世代を通じ、あるいは世代の隔絶を超えて共有されてはじめてうまくゆく……楽器は道具に過ぎない、歌わなければ。

だが、このことは演奏や母校のことだけではない。ブランドを創りだすに際してもまったく同じである。外形としての整備や付加的価値の訴求に終始する限り、ブランドは真価を発揮できない。その事業がもたらす本質的価値が強固・明確な理念となるとき、自然と機能しはじめるものだ。アカンサスクラブでの講演と、「二人の川村先生」をめぐる起こつたこの一件は、そうした現実を強く刻み付けるものだ。失われぬ本質としての価値を理念

化して明らかにしてこそ、真にブランドを創造することができる。

森 泰規 平成12年東京大学文学部(社会学)卒、同年株式会社博報堂入社。広報戦略、展示会・公共催事担当部門を経て現職。



平成29年3月22日に開催された第9回アカンサスクラブは講師の岩崎明彦さん(平成6年卒)のご意向により、非公開とさせていただきます。したがって、「アカンサスクラブ講演録」の掲載も差し控えさせていただきます。

リレー放談(第3回)

大相撲から寺社仏閣巡りまで

緒方浩一(平成7年卒)

第2回の伊丹さんから同期(平成7卒)ということバトンを受け、今回が三人目となりますが、前二者に倣い趣味について書いてみます。稀勢の里が横綱昇進をして更に人

気に拍車がかかっている大相撲観戦と、昨今ブームになっている寺社仏閣巡り(ご朱印)についてお話しします。

大相撲について

大相撲は小さなときからテレビで見ていたのですが、約10年前から東京場所をほぼ毎場所一回、それ以外にも年一回の横綱審議委員会稽古総見一般無料公開や、毎場所初日の前日に行われる土俵祭などに行っています。一度観に行かれるとわかりませんが、関取の出入りを間近で見ることができます。また、親方も観客と同じように館内を歩いているので、他のスポーツよりも親近感がわいてきます。

一番のおススメは横審稽古総見、無料公開は基本的に年一回です。ここ数年「昭和の日」辺りに公開されています(今年は5月3日一般公開になりました)。横綱大関同士の申し合いは見ごたえがあります。

次のおススメは千秋楽です。三役そろい踏み、表彰式、神送りの儀式など、千秋楽独自のイベントがたくさんあります。

また天覧相撲も貴重です。最近は大相撲もおさまり、年一回は天覧相撲があります。事前発表はありませんが、天覧相撲の日だけは木戸口に空港の検査のようなものがあり、警察官が多数いるのですぐにわかりま

す。当たりをつけて行ってここ2年間天覧相撲の日に観戦できました。相撲観戦時に忘れてはいけないのは、館内の焼き鳥、国技館地下のちやんこ屋台です。ちやんこ屋台は一場所に二回内容が変わります。この二つは必須なので相撲観戦の際には忘れずに食べてみてください！

さて、ここ最近は大横綱白鵬も衰えがみえ、並の横綱レベルになってきました。稀勢の里の横綱昇進は茨城出身力士としても非常に嬉しいニュースです。ただ、本来の横綱昇進の基準からすると、甘い基準で昇格させたことに変わりはありません。直近六場所の成績でも直近三場所の成績でも旭富士や小錦が横綱になれなかったときの成績に達していません。日本人横綱を切望して基準をなし崩しにし認められた面があります。これがどう評価されるかは、今後どれだけ優勝できるかということにかかっているのです。頑張ってもらいたいと思います。

また、土浦一中出身、平成生まれ幕内第一号の高安にも大関取りを頑張ってもらいたいです。相撲観戦から繋がりが生まれ、仲が良くなったお相撲さんやコアなファンの人たちとも繋がりができました。相撲観戦に行くとき必ず知り合いが複数いるので楽しみになっています。

しかし、これだけ人気があるとチケットが容易に取れないという問題が起こってきました。朝青龍の時代

や不祥事の頃はあまり人気がなくいつもガラガラでしたから簡単にチケットが取れたんですけれどね。(写真は仲の良いお相撲さん達と、元大関魁皇と、元大関霧島と)

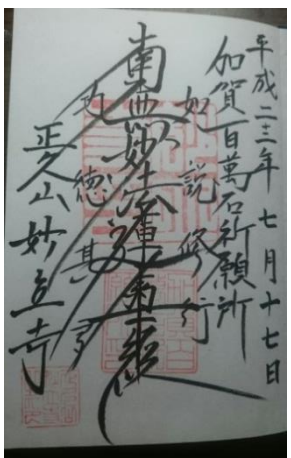


寺社仏閣巡りについて

ご朱印を初めて知ったのは平成20年10月です。鎌倉に行ったときにご朱印を貰っている人を見たのが始めたきっかけです。当時、自分の周りにご朱印を貰っている人はいませんでした。また、最近のようにご朱印を貰うのに並ぶということもありませんでした。むしろ、寺務所や社務所のピンポンを押してもらいうこともありました。

国内旅行に行くとき特に地方ではその地域の神社やお寺というものが存在が大きなことが分かります。まさにその地域の歴史であり生活の中心であったので寺社仏閣巡りを組み合わせてると名所観光に厚みが増します。

ご朱印は本来ご朱印帳にもらうものですが、出張等でいきなり行ってみようと立ったときなどご朱印帳を持ち合わせていない場合もあり、その時は寺社仏閣で事前に半紙に書いてあるものを貰ったりします。今までに2か所ご朱印帳を持っていないということで拒否されたことがありますが、ご朱印帳忘れにはくれぐれもご注意ください。



写真は萩の東光寺(毛利家奇数藩主の墓所)と金沢の忍者寺(妙立寺)で貰ったものです



最後に、東進会のホームページの宣伝をさせていただきます。ホームページの担当を沼里征二先輩(昭33卒)から引継ぎ、現在新ホームページを作成中です。今後の予定や過去の活動記録を含め、盛りだくさんの内容を掲載すべく、日々更新しております。是非、新ホームページをご覧ください。また、皆様からのホームページに掲載していない過去の記録や情報の提供もお待ちしています。

<https://to-shin-kai.jimdo.com/>

第4回リレー放談は、東進会の監事繋がりとということで、昭和46年卒の小野幹夫先輩にバトンタッチします。ゴルフで素晴らしいスコアをたたき出している小野先輩から、ゴルフのお話を聞かせていただければと思います。小野先輩よろしくお願ひします。

平成29年度大学合格者
 今年の東大合格者数は20人で国立高校中では第9位、私立を入れて第32位と少し回復した。東大合格者の戦後累計が991名(県内1位)に達し、来年は4桁の大会に乗る事は確実。また他大学への合格者数は筑波大(42)・東北大(24)・茨城大(18)等と健闘。

進修同窓会だより

創立120周年記念事業の目玉である旧本館の耐震補強改修工事が平成30年の完成に向けて順調に進んでいる。工事費用の一部8000万円を同窓会負担として募金活動が進められているが、これまでに約7880万円と後一步。屋根材のカナダ産天然スレート瓦の施工で発生した廃材を活用した記念品の準備も進められ大変楽しみである。記念式典は今年の11月18日(土)、招待記念講演は五神東大総長の予定である。

今年もSGH(スーパーグローバルハイスクール)の取り組みで、米國研修などが熱心に進められている。我が校の卒業生には世界中で活躍している方々が少なくない。しかし、日本の国際的な存在感はまだまだあるべき状態がなく、若い時代に海外文化と接する機会は極めて貴重であり、更なる充実が期待される。

進修同窓会総会、各周年記念祝賀会の日程は平成30年4月15日(日)・平成31年4月14日(日)と決定。

東進会会長 飯塚哲哉

平成29年度 総会・懇親会のお知らせ

- ・ 日 時 : 平成29年6月11日(日曜日)
 11:00 受付開始
 12:00 母校吹奏楽部による演奏
 12:20 母校応援指導部による演舞
 12:30 総 会
 13:10 講 演 「土浦一高東進会 Facebook」 ページで最新情報
 13:40 懇親会 提供中です。ぜひご登録ください。
 15:30 閉 会
- ・ 場 所 : 学士会館 210号室
 千代田区神田錦町3-28 03(3292)5936
- ・ 会 費 : 東進会年会費3,000円 【同封の振込用紙をご利用ください】
 懇 親 会 費7,000円
- ・ 講 演 : 「地域とアート ～鳥取から見える文化芸術政策の未来～」
 竹内 潔(平成11年卒、鳥取大学地域学部准教授)
- ・ 司 会 : 伊丹 牧子(平成7年卒)
- ・ 演 奏 : モーツァルト「弦楽四重奏と独奏クラリネットによる五重奏曲」他
 森 泰規(平成8年卒) 他
- ・ 当番幹事 : 伊東 明彦(平成5年卒) 鈴木 徹(平成5年卒)
 森 泰規(平成8年卒) 藤井 麻美子(平成9年卒)
 佐々木 祐介(平成10年卒) 竹内 潔(平成11年卒)